

## 服部英雄さんとの懐かしい思い出

佐久間, 豊  
元文化庁文化財保護部記念物課埋蔵文化財部門 : 文化財調査官

<https://doi.org/10.15017/1523909>

---

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp.258-260, 2015-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室  
バージョン :  
権利関係 :

# 服部英雄さんとの懐かしい思い出

佐久間 豊

服部さんとの初めての出会いは、いまから三二年前、私が千葉県教育庁から文化庁記念物課に移った一九八四年（昭和五九年）四月一日だった。私の机の斜め右前方に服部さんの机があった。机の上には、椅子の前の僅かなスペースを除いて、左右に書類がうず高く積まれていた。少しでも触れれば崩れそうな状態だ。服部さんは、私が登庁しても、ほとんど椅子に座っていることはなかった。都道府県への出張も多かったが、在庁の時は、どうも史跡部門としての職務の傍ら、図書館で研究に勤しんでいたようだ。そうした勤務態度でも、上司や同僚から憎まれぬ服部さんの性格が羨ましかった。

私が記念物課で仕事を始めてから数日後、最初の会話は千葉県の酒々井町と佐倉市に跨った本佐倉城跡に関してだった。服部さんの妹さんが佐倉市で教員をされていたこともあり、以前から強い関心を抱いていたそうだ。私も千葉県教育庁文化課の史跡担当の一人として、一九七九年（昭和五四年）から本佐倉城跡の県指定を目指していた。しかしながら、地元の同意を得ることができないままになっていた。服部さんは簡単に一言「早く一気に国史跡に指定しましょう」。私も即座に意気投合した。

もともと、それが実現するまでには長い時間が必要だった。私は一九九三年（平成五年）に再び千葉県教育庁文化課に戻り、地元の酒々井町、佐倉市と共に、土地所有者の方々と何回も何回も協議を重ねた。数年がかりでまとめた国史跡指定の申請書案を文化庁記念物課に持参した時のことは、特に鮮明に覚えている。記念物課で最も怖いが優しさも人一倍の和田勝彦さんに、史跡価値や指定範囲などに

関する厳しい指摘を長時間にわたって受けたのだ。同席していた服部さんは全く動じていなかったようだが、私は冷や汗の掻き通しだった。さらに数年が経過し文化財保護審議会の答申を経て、やっと国指定が実現したのは一九九八年（平成一〇年）だった。その時の喜びは、約二〇年の歳月がかかったこともあつて格別だった。

本佐倉城が国史跡の価値を十分に有していることは、誰が見ても間違いない。九州から東北に幅広く影響力を残した千葉氏の戦国時代の居城で保存状況も頗る良好だ。ただし、服部さんの何事にもたじろがない純真・純朴な熱意がなければ、いまの時点でも国史跡指定が実現していたかどうか微妙である。史跡指定は何と言ってもタイミングが重要なのだ。

服部さんとは同年代ということもあつて、個人的にも色々な付き合いがある。深夜まで酒を飲んで、新婚生活？を送っていた服部さんの宿舎に転がり込んだこともあった。服部さんが脱ぎ捨て散らかした背広などを文句ひとつ言わずに片付けていく奥さんの姿は、我が家庭とは全く違い、まだ泥酔状態の中で不思議に思いながらも感心一振りだった。

当時の記念物課は、史跡部門の狩野久さん、埋蔵文化財部門の河原純之さん、名勝部門の牛川喜幸さんや安原啓示さんといった主任文化財調査官を中心とした飲み会が、すこぶる多かった。史跡部門の仲野浩さんも時折参加された。いまはなぐ店の名前も忘れかけているが、安い酒場を目指す日々だった。服部さんもアルコールが好きだが、とにかく徹底してビールしか飲まない主義だ。いまだにそうだろう。飲み会では埋蔵文化財部門が集金などの幹事を任せられており、私も担当するこ

とが多かった。いつも割り勘だったので、服部さんが参加した時は、ビールは割高で当然として高くつく。しかも服部さんは、さらに値段の高い生ビールが大好きなのだ。きつと九州の仲間たちも苦労しているに違いないと思う。「また佐久間さんの顔が暗くなった」などと言いながらも、ニコニコと何杯も何杯も生ジョッキを注文していた人懐っこい笑顔は、誰も憎むことができなかった。

服部さんとの最大の思い出は何と言っても、いつ頃だったか記憶が鮮明ではないが、少なくとも二〇年以上前、八幡平、川井村（現在は宮古市）への岩魚釣りの旅だ。盛岡駅で待ち合わせ、私のつたない運転で向かったのは八幡平だ。八幡平山頂近くのパーキングを少し下った藤七温泉の前から深い山中に入り、ほぼ半日かかって清流が溢れる大深沢に着いた。岩魚は、そうした人里離れた場所にしか棲息していないそうだ。服部さんは高校時代には山岳部だったそうで、さすがに何時間歩こうと息ひとつ切らしていない。一方の私は疲れて歩くのもやっとの状態。服部さんは、私の体調はそつちのけで早速テントを張り、休む間もなく岩魚釣りを始める。ベテランの服部さん、記憶では短時間の内に確か大小二匹の岩魚を釣り上げた。一方の私といえば、尾てい骨を岩に打ち付け激しく痛み、とても釣りどころではない。さらに追い打ちをかけるように雨も降り始める。次第に激しくなる雨中の暗いテントで食べた岩魚の味は複雑だった。ひよっとすると遭難に近い状況にあったのかも知れない。

翌朝には雨は上がっていたと思うが、さらなる苦難が続いた。藤七温泉に向かつての帰路、当然のこととして前日とは違い登りの連続だ。雨上がりでぬかった道ならぬ道に戻らなくてはならない。悪い予感はその途程で道に迷い、尾てい骨の痛みにも耐えつつ、小さいながらも滝のように冷たい水が流れ落ちてくる直角に近い崖を上ったり、いつ終わるとも知れぬ藪かきをしたり、私にとっては経験したことがない難行の連続だった。とうとう途中で私は、雨が浸み込んだリュックの重さに根を上げ、携帯していた飯盒などの装備を投げ捨ててしまった。まさに登山家失格だ。言い訳にしかないが、後から聞いた話では、服部さんと山に入った多くの方々が

何らかの事故などに遭っていたようだ。さらに怪我をした人も多いとのこと。もう少し早く聞いていれば、服部さんと二人だけで行動を共にすることは決してなかったのだが。幸い怪我がなかったことだけでも良しとしなければと思う。

苦行時間、言うこの体で希望が見える尾根筋に出た。服部さんは昨日にも増して元気にシャヤシャヤとしていたが、私は昨日とは比較できないくらいの疲労困憊で、足が思うように前に出ない。重たい足を引きずり、一〇歩進んでは止まり、また一〇歩進んでは止まりを教え切れないくらいに繰り返しながら、どれだけ時間が経過したかは覚えていないが、やっとの思いで藤七温泉にたどり着いた。到着して直ちに温泉に浸かったが、強い硫黄の匂いが漂った湯舟が未だに忘れられない。まさに何物にも代えがたい生き返った想いだ。その晩から朝にかけては、生涯で味わったことがない熟睡にも陥った。

翌朝は多少の元気を取り戻した私の運転で、八幡平山頂に戻り八幡平アスピーテラインに乗って田沢湖方面へ向かった。途中では、ふけの湯、後生掛温泉などで硫黄の湯を楽しみつつ、国道三四一号から国道四六号線に出て、やがて盛岡市内に入った。それ以降の詳細は定かに記憶していないが、唯一覚えてるのは岩手県庁近くの石割桜だ。それまでも石割桜は何回も観ているので特段珍しくはなかったが、その前で服部さんは当時の盛岡市教育委員会の八木光則氏と待ち合わせをしていた。二人の要件は私のあずかり知るところではないが、その時の光景が妙に記憶に残っている。それから一路、盛岡市と宮古市を結ぶ国道一〇六号線で区界高原を超え、閉伊川沿いに早池峰山麓を右手に見ながら川井村に向かった。盛岡市内を出てから約一時間半後に到着したのは、川井村で義姉の刈屋カツ子さんが経営している刈屋旅館だ。到着し荷物を置いて待つことなく早速、川井村と遠野市を結ぶ国道三四四号から入った溪流に向かった。目的は言うまでもなく岩魚釣りだ。夕陽が沈むまで何本かの溪流沿いに、たっぷりと釣りを楽しんだ。人里離れた所ではないと棲息していないはずの岩魚が、早池峰山麓では不思議と民家の近くでも面白いように釣れた。

きつと岩魚も人に慣れてくることがあるのだろう。その夜には、もう一人の義姉の熊谷フミ子さんが造ってくれた岩魚骨酒の香ばしい味に堪能し、すっかりと病み付きになつてしまった。最近になつて刈屋旅館に手伝いに行つていた折に、関東地方からの宿泊客が釣つてきた岩魚を骨酒にして味わう機会を得た。服部さんとの旅を振り返りながら、二〇一〇年以上経つても全く変わらない味を改めてかみしめた。

毎日出版文化賞祝賀会（二〇一二年）の席上で、服部さんご夫婦と久し振りにお会いした。服部さんとは約一〇年ぶり、奥さんとは何と三十年を超えている。若々しさを溢れる凛々しいご長男も一緒だった。やはり時の流れを感じる。にもかかわらず以前と全くといってよいほど変わらない服部さん、さらに落ち着きの中にも清々しく澁刺とした奥さまの雰囲気を受けて、あたかもタイムカプセルで三〇年前に戻つたような感覚にも陥つた。記念物課在籍当時は中々近くには寄れなかつた仲野浩さんとも再会することができた。この時の仲野さんは現役時代とは違つて、とにかく優しかった。

まだまだ想い出は尽きないが、服部さんは、いままで私が付き合つてきた多くの同世代の中で、私の思考の枠では到底理解できない器の大きさを実感した数少ない人物だ。これからも是非、今回の退官を契機にして、さらに大きな功績を残してほしい。それが必ず出来る人だ。そして服部さんと私の二人が元気な間に、もう一度八幡平に向かう機会が訪れることに期待して筆をおくこととしたい。

（元文化庁文化財保護部記念物課埋蔵文化財部門文化財調査官）